

中曽根支持を表明した鉄道労連

日刊 動労千葉

87. 12. 21

No. 2725

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五・六（公衆）〇四七二・二二七二・〇七

「竹下よ、生ぬるすはなげや」とハツパをかける鉄道労連

動労革マル・鉄道労連は、自民党（それも中曽根を）支持する労働組合ならざる労働組合であることを明らかにしはじめた。

十二月十六日に開催された、鉄道労連第二回定期中央委員会方針案における「取り巻く情勢」の情勢認識は、まさに、あけすけにそのことを語っている。

書かれている内容は、「その強力な政局運営により行革をはじめとする各種課題の実現推進を図った中曽根前首相」にくらべて竹下は、「調整のみに目を奪われ、重要な政策課題への対応に遅れを取ることはないように注視しておく必要がある」と、中曽根政治を全面賛美し、竹下に対して、「多種多様な意見の調整は民主政治の最も重要な基本であるが：：調整に目を奪われるな」「ちゅうちよすることなく攻撃しろ」とハツパをかけているのである。

かつて、どこの労働組合がこれほど露骨に中曽根支持を表明したことがあったであろうか。つまり、鉄道労連はもはや、単なる「労資協調組合」ではないのである。戦争に向けた産業報国会そのものなのだ。

そもそも、中曽根がやった「行革をはじめとする各種課題の実現推進とはいったい何なのか。国鉄分割・民営化―十万人首切り攻撃はもろろんのこと、防衛費一％枠突破、臨教審による教育の国

家統制の攻撃、日の丸や君が代、天皇制の前面化、大型間接税や国家機密法の導入の策動、労基法の改悪、警察権力の肥大化、福祉の切り捨て等々、あげればきりがなほどの反動攻撃の数々である。動労革マル・鉄道労連は、これらの攻撃を全面的に公式の場で評価したのである。しかも、自ら「民主政治、民主的な運営に目を奪われるな」と、強権的な独裁政治でいくべきだ、と進言しているしまつである。

実際、この方針案のなかには、中曽根・自民党に対する批判的な言葉はただのひと言もでてこないのである。

その一方、国労など闘う部分に対しては、罵詈雑言でうめつくしているのだ。

これはまさに、「全民労連」によって開始された、労働運動の産業報国会化の流れが行きつく先を示しているのである。動労革マル・鉄道労連は、国鉄分割・民営化攻撃のなかで、当局以上に凶暴なその先兵となったように、労働運動の産報化攻撃のなかでも、同じ役割をはたそうとしているのである。

鉄道労連解体は、今までもまして火急の課題となつていのである。危機にたつ動労革マル・鉄道労連を打倒しよう。

革マル・鉄道労連の正体見えたり

〈第1号議案〉

当面の活動方針（案）

I. 鉄道労連を取り巻く情勢

1. 政治の動向

(1) 竹下内閣の発足

五年にわたって政権を担当した中曽根首相の退陣に伴って、11月6日に衆参両院で首相指名投票が行われ、竹下内閣が発足しました。

税制改革をはじめとして各種の重要課題を引き継いでスタートした竹下首相は、その強力な政局運営により行革をはじめとする各種課題の実現推進を図った中曽根前首相と異なり、先ず第一に「周到な調整」を掲げています。

多種多様にわたる意見の調整のうえに政局を運営することは、民主政治にとって最も重要な基本であることは当然であります。実質的な意見の反映がなされない「調整」であったり、また逆に、「調整」のみに目を奪われ、重要な政策課題への対応に遅れを取ることはないよう、注視しておく必要があります。

12/16 鉄道労連第2回定期中央委員会方針案

今年もあと10日間だ。冬季物販目標達成にむけて奮闘しよう！